

アベベ・ビキラからみたオリンピック・パラリンピック

—親衛隊入隊から障がい者スポーツ参加に着目して—

川西 勇希 (大分大学)

1. 目的

1960年ローマで初めてパラリンピックが開催された。わが国でも2020年の東京オリンピック・パラリンピックが契機となり、パラリンピックへの注目は高まっているが、澤江は、言葉は知っていても十分な理解がされていないことを報告している。

本研究で着目するアベベ・ビキラ（以下、アベベとする）は、ローマ、東京、メキシコでのオリンピックに出場し、ローマ大会では裸足で走り抜き、当時の世界記録で優勝したことで注目を浴びた。一部の資料²⁾で、1972年のパラリンピックに出場について記されているが、オリンピックの成績に比べると、あまり知られていないと考えられる。そこで、本研究ではオリンピックとパラリンピックに出場したアベベに着目して、パラリンピックへの出場の際の経緯を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

まずパラリンピックの成立について（本稿では割愛する）、次に、ローマ・東京・メキシコの3大会での成績や大会後の生活の変化、社会に与えた影響などを検討し、そしてパラリンピックに参加した経緯について明らかにする。研究で用いる資料は『アベベを覚えていますか』（山田一廣著、新声社、1984年）と『アベベ・ビキラ』（ティム・シューダ著・秋山勝訳、草思社、2011年）である。

3. ローマ大会にいたるまで

アベベは、1932年エチオピアのショア州ディノバのジョル村の貧しい百姓の家庭に生まれ、家畜の餌を求めて野山を駆け巡っていた。15歳の時にジョル村での親衛隊隊員募集のための説明会に参加し、入隊後十年で土地を受けることができることから入隊を決意した。1951年19歳で親衛隊入隊後は、訓練で長距離走のタイムを短縮して隊の選抜選手になり、1957年5月にアジス・アベバで行われた四軍（親衛隊、陸軍、海軍、空軍）の陸上競技大会に出場した。

この大会の成績が認められ1960年ローマ大会の陸上競技の強化選手となった。この時の専任コーチがオンニ・ヘルマン・ニスカネンである。彼はコーチによってマラソンへの適性が評価され、特別メニューでのトレーニングを開始した。

4. アベベとパラリンピック（1972年）

オリンピックの成績について簡単に述べると、ローマでの優勝によってアフリカ系黒人選手の運動能力が注目され、2連覇を達成した東京では、長距離選手の高地でのトレーニングに注目が集まった。

1969年、彼はアジス・アベバに向かう途中、デッシーロードで事故を起こし、この負傷で車いす生活となった。当時のエチオピアの皇帝ハイレ・セラシエの命令により、まさにストーク・マンデビル病院に運ばれた。事故から4ヶ月後には当該病院内の大会で「洋弓」と「車いす競争」に、1970年には「車いす競争」と卓球に出場した。1971年、ミュンヘン五輪組織委員会から来賓として招待され、車いすによる種目で参加した。これが1972年パラリンピックのアーチェリーであったとみられる。

5. 結論

本研究では、アベベのストーク・マンデビル病院への入院、大会参加、また1972年パラリンピックへの参加が明らかになった。これらは当時の皇帝によるところが大きく、皇帝はアベベを寵愛し国境を越えた治療を命じたとみられる。それがストーク・マンデビル病院への転院、障がい者スポーツの契機となるストーク・マンデビル大会の参加へとつながり、彼はパラリンピックへの出場を果たした。

6. 主な参考文献

- 1) 澤江幸則、「パラリンピックの教材としての価値」、『体育科教育』編集部編、『体育科教育』第64巻第10号、2016年、pp.44-47
- 2) 日本オリンピック・アカデミー編、『JOAオリンピック小事典』、2016年、p.262